

丹波山村と小菅村は、戦国時代までは一つの村であったが、文禄検地により二村に分かれた。両村は、隣り合っている村であるが、共同で事業を実施することはあまりない。その遠因となっているのが、当時の牛による境界線の決め方だったと言われている（尾根を越して、丹波山村に少し下ったところが境界線になっている）。今回、平成の境界争いとして、改めて実施することで両村をPRすると共に、両村の交流を進め、未来に向かって再生していくことを目的とする。

丹波と小菅の村境争い 牛が決めた境界線（民話）

昔、丹波山村と小菅村はひとつの大きな村であったと。今から410年ほどまえ、武田勝頼公が滅んじまって、豊臣さまの時代になった頃の話だと。豊臣さまが、文禄検地というのをやってな、武田公の領地を治めやすいようにと村々の境界線の改めをして、広すぎるこの村を「丹波と小菅の二つの村に分ける」ことが決められたんだと。

昔は、丹波と小菅とはたいそう仲が悪くてな、村の境界線をどこにするかで村中がもめたそうだ。そこで、皆が話し合っ「丹波の宿と小菅の川久保から、同時に牛を歩かせて、その牛が出会ったところを境界にする」ことにきめたのサ。どちらかの牛が、少しでも早く出発しては困ると、丹波の者が小菅に、小菅の者が丹波にと、それぞれ一人ずつが行って、一番どりが鳴いたら牛を出発させることになった。これで公平にきまるはずだわナ……。

ところがだ。小菅の衆の方が少し悪知恵を働かせたようだ。「一番どりがとまる竹筒に穴をあけてな、その竹筒にお湯を流し込んだのサ。竹筒はあつくなるわナ。にわとりは、足があつくなったのでな、朝がきたとおもいちがいをして、いつもの朝より少し早く一番の時をつげたのサ」。見張役の丹波の者は、一番どりが鳴いたんで、小菅からの牛を出発させた。その頃、丹波の一番どりはもちろんまだ鳴かないわな。早く出発すれば、それだけ遠くまで牛は、いけるわけだ。

そんなわけで、丹波と小菅の境界は峠や谷になくて、尾根を通り越して少し丹波に下ったところになっているだあと。

※民話は諸説あります。

平成30年3月25日（日）開催

ReBORN 丹波山村・小菅村

午前9時	出陣式	丹波山村 熊野神社 小菅村 箭弓神社
午前9時30分	出発	両村役場
午前10時30分～ 午前11時頃	出会ったところが平成の境界線	
午前11時30分頃	交流会	旧道の大丹波峠 (大田和峠)

行列に参加する方を募集しています！

3月9日までに商工会までご連絡下さい。

丹波山村商工会 0428-88-0444

小菅村商工会 0428-87-0404

—村創生、境界線をめぐる民話から両村の明日を考えるイベント—
今、我々を取り巻く状況は、人口減少、社会構造の変化など様々な問題を抱え、閉塞と停滞の感を拭えていません。山梨県下でも、人口の少なさでは最下位とその次という丹波山村と小菅村は行政、自治体の枠を超え、地域として発展、活性を共に考えていかねばなりません。そもそも、甲斐のなかでも辺境のひとつの地域として歴史を刻んできた両村。その古きを振り返り、学びを考察することにより、地域の—再生—を図っていくことが重要になってきています。ReBORN—リボーン—、(尹)ールネッサンス—、—再生—とは、歴史の転換期に次の新しい時代の波を創っていくこと。

丹波山村、小菅村は、村創生の原点を考えるこのイベントを通じて、今川トンネル等のこれからの両村の新たな連携や展開と成長を目指す起点としていきます。